

Catuhstava とナーガールジュナ —諸著作の真偽性—

津田 明雅

27 / Jan. / 2006

<目次>

1. はじめに	3
2. ナーガールジュナについて	4
3. 諸著作の真偽性	8
3.1. <i>Catuhstava</i>	11
研究史	11
引用文献	19
テキストおよび注釈書について	22
<i>Lokāhastava</i>	38
<i>Nirvāṇastava</i>	40
<i>Acintyastava</i>	42
<i>Paramāthastava</i>	69
<i>Catuhstava</i> テキスト	70
<i>Catuhstava</i> 索引	156
注釈書テキスト	181
3.2. ナーガールジュナと讃歌	290
大乘仏教運動と讃歌	290
仏塔崇拜と經典崇拜	291
ナーガールジュナに帰せられる讃歌	293
諸讃歌の真偽性	293
<i>Stava-s</i> テキスト	308
<i>Dharmadhātustava</i>	311
<i>Cittavajrastava</i>	331
<i>Kāyaśrayastotra</i>	333
<i>Sattvārādhanaśtava</i>	337
<i>Prajāpāramitāstotra</i>	343
<i>Śrīyatatāstava</i>	348
<i>Niruttarastava</i>	353
<i>Āryamañjuśrībhāṭṭārakarakarṇāstotra</i>	356
<i>Aṣṭamahāsthānacaitiyyastotra</i> (P no.2024)	361
<i>Aṣṭamahāsthānacaitiyyastotra</i> (P no.2025)	364
<i>Dvādaśākāra nāma nayaśtotra</i>	367

<i>Vandanaśāstotra</i>	371
<i>Sattvārādhanaśāstihā</i>	374
<i>Niruttaraśāstotra</i>	379
Number of Syllables (Meter)	381
3.3. その他の諸著作	384
I. <i>Mūlamanadhyamakahārikāḥ</i>	389
II. <i>Śūnyatāśāptatī</i>	392
III. <i>Vīgrahavyāvartanā</i>	395
IV. <i>Vaidalyaparakaraṇa</i>	400
V. <i>*Vyavahārasiddhī</i>	409
VI. <i>Yuktisāśikā</i>	410
VII. <i>Ratnāvalā</i>	413
VIII. <i>Subhīlekha</i>	416
IX. <i>*Bodhisambhāraka</i>	418
X. <i>Pratītyasamutpādaya</i>	421
XI. <i>Mahāyānavivṛtikā</i>	427
XII. <i>Bodhicittavivaraṇa</i>	430
XIII. <i>Sūtrasamuccaya</i>	433
XIV. <i>*Dvādaśamukhaśāstra</i>	443
4. まとめ	444
略語および参考文献	449

1. はじめに

仏教史上最も重要な人物といえば、開祖シャーカーヤニ・ブツダ (Śākyamuni Buddha) であろう。しかし一方で、中観派の始祖ナーガールジュナ (Nāgārjuna) もまた偉大であった。仏教の多彩な思想的展開や文化を越えた広域な伝播を考えると、ブツダの教えに一つの体系を与えたナーガールジュナの役割は、ある意味ブツダ以上に重要であったといわねばならない。対機説法によって説かれた悟りの内容はブツダの没後弟子たちによってまとめられ經典として伝承されていくが、それらはいまだ思想的に体系づけられただけではなかった。仏教のさらなる発展のためには、その後の大乘經典運動およびナーガールジュナの出現をまたねねばならない。ナーガールジュナ以後の仏教思想はすべて彼を基点として展開したものだといっても過言ではないし、彼の著作が經典並みの権威をもって引用されることもしばしばである。中観派のみならず瑜伽行唯識派などの仏教諸学派ないし密教に至るまで影響を及ぼしているし、チベット、中国、日本など伝播先の地域でもその影響力は衰えることを知らない。彼は宗教体験に根ざした独自の仏教理解を示したが、仏教とは信仰の宗教であるとともに智慧すなわち理解の宗教であることをわれわれに改めて示してくれたのである。それほど重要な人物でありながら、われわれは未だに彼の輪郭を明瞭につかみきれていない。未確定な生存年代、諸著作の真偽問題、同名異人の存在など多くの謎が残されている。

ナーガールジュナの著作に関する総合的な研究としては、すでにリントナー氏による優れたものがある¹⁾。その功績は、数多くあるナーガールジュナの著作のそれぞれの真偽問題に一つの結論を下したことにあり、議論の余地も多く残したが、以来、ナーガールジュナの真作の究明に拍車をかけることとなった。リントナー氏の研究に引き続き、そこに収められた個々の作品についてスベインのトーラ氏とドラゴネッティ氏が、共同で、あるいは単独に、さらに詳細な、時には反論する、多くの論文を発表してきた。また他の研究者による反応も出るなど、個々の作品の真偽問題に関する議論は活発になってきている。しかし、その後、先のリントナー氏のもののような総合的な研究はなく、さらに次なるステップへと進むための巨視的かつ文献学的な研究がなされている。

本論文ではナーガールジュナという人物の輪郭を明らかにすることを目的として、リントナー氏の問題意識をよき手本とし、その他の諸学者による研究成果をも踏まえた上で、諸作品の真偽問題や、それらの著作順の解明を中心にして論じていく。特に *Catustava* に関して詳しく分析し、次いでこれまでに十分に検討されることのなかった諸讃歌に関してもみていく。さらにその他の諸著作についても、先行研究をまとめることを中心にして真偽性を判定していく。こうして真作と思われるものを選び抜き、それらを内容の連貫性によって分類し、最終的には著作順に並べることができるを試みたい。このような手続を踏むことによって、ナーガールジュナの人物像及びその生涯における思想の展開が、少しでも明らかになることを願う。

¹⁾ Lindtner, Chr. (1982).

2. ナーガールジュナについて

ナーガールジュナに帰せられる作品は、非常に多い。例えばチベットの大蔵経北京版でナーガールジュナに帰せられている作品を数えると、讃頌部に19、秘密疏部に63、中観部に33、諸経疏部に4、阿毘達磨部に1、律疏部に1、書翰部に5、医方明部に2、工巧明部に3、修身部に6あり、合計140にもものぼる²⁾。これだけの数の、しかもこれだけ多様な分野にわたる著作を一人の人物に帰することは、とうてい不可能であろう。われわれが問題とするのは、主に中観部にみられる作品を著した人物、つまり中観派の始祖ナーガールジュナである。彼以外のナーガールジュナは、彼以後に彼の權威を借りて同じ名を名乗ったか、あるいは彼に仮託されたものとみて、まず間違いないだろう。デイヴィッド・ゴードン・ホワイト氏は中観哲学者のほかに、密教書の著者、医学書の著者、錬金術師、眼科医など、13人ものナーガールジュナを挙げる³⁾。またセイフオート・ルエグ氏も金剛乗のナーガールジュナ (Ārya Nāgārjuna) に触れ、彼は7, 8世紀の人物で、ラーフラバドドラ (Rāhulabhadra, Saraha) の弟子でありナーガボーディ (Nāgabodhi) の師匠であった⁴⁾、*Bodhicittavivaraṇa* や *Guhyasamāja* 注釈や *Pañcakrama* の作者ではな

いかとする⁵⁾。中観派の祖ナーガールジュナの生涯については、これまでに多くの研究がなされてきたが、不明な点が非常に多い。以下は彼の人物像および生涯について、これまでに明らかにになった点が、梶山雄一と瓜生津隆真の両氏によって最も端的に述べられたものである⁶⁾。諸著作の真偽性判断の準備段階として、少し長くなるけれど、以下に引用して紹介することにする。

ナーガールジュナ (Nāgārjuna 龍樹) は般若経の思想を継承しながら、大乘仏教に哲学的基礎を与えた。その後、長い期間にわたり、広大な領域において発展した各種の仏教思想で、彼の思维の本質をその基盤としなかったものは一つもない、といっても過言ではない。さらに現代においては、彼はただ古代インドの、そして仏教の思想家としてだけでなく、人類世界の生んだ最大の哲学者のひとつとして認められ、その思想の近代性さえもが高く評価されるにいたっている。

²⁾ 讃頌部: nos.2010-2028, 秘密疏部: 2336, 2555, 2556, 2627, 2628, 2639, 2644-2646, 2648, 2649, 2661-2667, 3033, 3034, 3048-3051, 3124, 3224, 3307, 3500, 3525, 3555, 3556, 3671, 3688-3691, 3712, 3877, 3891, 3938, 4189, 4310, 4340, 4384, 4467, 4487, 4551, 4588, 4710, 4788, 4792, 4828, 4829, 4847, 4878, 4881, 4898, 4900, 4942, 4954, 4971, 5017, 5100; 中観部: 5224-5238, 5240, 5243, 5304, 5330, 5361, 5405, 5409, 5414, 5428, 5429, 5465-5472; 諸経疏部: 5485, 5486, 5506, 5512; 阿毘達磨部: 5602, 律疏部: 5629, 書翰部: 5638, 5660-5662, 5682; 医方明部: 5795, 5797; 工巧明部: 5808, 5809, 5811; 修身部: 5820-5822, 雑部: 5878, 5905, 5930, 5932, 5954, 5956。これらのほか、ナーガールジュナに類似した名をもつ著者による作品として、次のものがある。Nāgārjunaagarbha: nos.3069, 3125, 3464, 5239, 5796; Nāgabodhi: 2675, 2697, 2702, 2827, 2871, 3044, 3052, 3054, 3055, 3259, 4924; Nāgabuddhi: 2674, 2677, 4606; Nāgamitra: 5290, Kīṣṇanāgārjuna: 4962。

³⁾ White, D. G. (1996) pp.66.35-67.6.

⁴⁾ Seyfort Ruegg, D. (1981) pp.104.17-106.11.

⁵⁾ 梶山雄一, 瓜生津隆真 (1974) pp.415.2-418.3。また次にも詳しい記述がある: 瓜生津隆真 (2004) pp.20-60; 梶山雄一 (1973) pp.94-98。

それにもかかわらず、インド史を代表する人物の大部分がそうであるように、ナーガールジュナの人とその生涯について確実なことはほとんど何も知られていない。彼の伝記としてはクマールラジーヴァ (鳩摩羅什, 350-409) 訳と伝える『龍樹菩薩伝』(大正大藏経第50巻)があり、これを基礎資料として書き直されたと見てよいものが『付法藏因縁伝』巻5 (同書同巻)にも収載されている。また玄奘の『大唐西域記』(同書第51巻)その他の中国文献に断片的記述が見られる。チベットではブトン (1290-1364)、ターラナータ (1575-1616) の各仏教史、スムパケンポ (1704-1776) の『パクサムジョ・タンサン』などから、かなり詳しい伝承が集められる。しかし、インド原典で伝わるナーガールジュナ伝はただの一つも存在しない。

クマールラジーヴァ訳の伝記の内容は、次のように要約しうる。「ナーガールジュナは南インドのパラモンに生まれた。パラモンとしてのあらゆる教養を身につけ、若くして学識の誉れが高かった。彼は三人の友人とともに魔術を学び、隠身の秘術を習得し、しばしば宮廷に忍びこんで婦女を誘惑した。事があらわれて三人の友は斬られ、ナーガールジュナひとり王の傍らに身を避けた。彼は愛欲が苦悩と不幸の原因であることに目ざめ、もし自分が宮廷を逃れ出て生き永らえるならば出家しようと誓った。事実、逃走に成功した彼は、山上のストウーパ (塔) を訪ねて受戒出家した。小乗の仏典を学び、さらに別種の経典を探しているうちに、彼はヒマラヤ山中の老比丘からいくらかの大乗経典を授けられた。これを学んだのち、彼はインド中を遍歴し、仏教・非仏教の遊行者や論師と対論してこれを打ち破った。彼は、仏法は微妙であるが論理になお欠けるところがあると思い、みづから一学派を創立しようとした。マハー・ナーガ (大龍) 菩薩が彼を哀れんで海底の龍宮に導き大乘経典を与えた。彼はそこでを学んで深い意味をさとした。龍 (ナーガ) は彼を南インドに連れ帰った。彼はそこで国王を教化し、非仏教者を論破し、多くの著作を行なった。ナーガールジュナの死後百年、南インドの人びとは廟を建てて彼を仏陀と同じように崇めている」

チベット側の史伝は、中国側と二、三の共通点はあるにせよ、全体としては似ても似つかぬナーガールジュナ像を伝えている。ここでは、彼は同じ魔術師ではあっても錬金術にすぐれ、その術力で比丘や大衆に布施を行なったとされる。彼は初めから大乘仏教者であったし、六、七世紀以降展開したタントラ仏教 (密教) の行者で、一般に同名異人とみなされているナーガールジュナと同一視され、そのためもあって彼は六百年余りの長寿を与えられている。彼は海底の龍宮で経典を得たのではなくて、地下の龍王に教えを説いているのである。彼は南インドのヴィダルバの出身で、後半生にふたたび南インドに赴いてはいるが、その主たる活動地は北インドのナーランダーであったといわれる。(実際は、ナーランダー一僧院が教学の中心となるのは五世紀以後のことである。チベット史伝はいずれもかなり後世の成立である点からみても、その伝承はあまり信を措くに足らない。)

クマールラジーヴァの伝記は、これも個々の事跡についてはフィクションに満ちたものであるとはいえ、ナーガールジュナ没後百余年の作品であるだけに、全体としてはナーガールジュナの人間像を彷彿させるのに成功していると思われる。その激情的な

2. ナーガールジュナについて

性格と劇的な回心、バラモン教や小乗仏教の教学を経て大乗仏教の真髄を求めるその遍歴、まれにみる論理の鋭鋒による論争の物語などは、般若経の精神を受け継いだ大乘菩薩としてのナーガールジュナにふさわしいイメージであるだけでなく、われわれが彼の著作の内容から受ける印象とへだたっていない。

西暦紀元前後の数世紀間、シャータヴァーハナ王朝（アンドラ王国）が南インド一帯に君臨していたが、ナーガールジュナがこの王朝の一王と親交をもっていたこと、後半生に南インド吉祥山（シュリーパルヴァタ）に在住したことなどは、伝記からも、また彼の著作からうかがえることであるが、近年の考古学上の諸発見によっても確認されにいたっている。しかし、ナーガールジュナの友人であったシャータヴァーハナの王がだれであるかについては、諸説まちまちで、まだ断定はできない⁹⁾。ナーガールジュナの著作と『ニヤーヤ・スートラ』その他の諸文献との比較、クマールラジャの『龍樹菩薩伝』にある「ナーガールジュナ滅後百年うんぬん」という記述、クマールラジャの同時代人であった慧遠、僧肇、僧叡などもナーガールジュナの年代について議論をしている。それらを総合的に考察しても、われわれは彼がおおよそ二〜三世紀に活躍したと推定できるだけである。わが国の学者の多くは150-250年ごろとしている。

この150-250年ごろという年代は、宇井伯壽氏によって算出されたものである。同氏は中国での伝承を利用して、ブッダの生存年代を紀元前628-548年と定め、ナーガールジュナはブッダ入滅より700-800年余り後の誕生とし、さらに鳩摩羅什著『龍樹菩薩伝』の「龍樹は」去此世已来至今始過百歳」という記述より、2-3世紀（150-250年）をその生存年代とする⁷⁾。ブッダの年代などに関しては異論もあり⁸⁾、この算出方法が必ずしも正しいと認められているわけではないが、結果的に多くの研究者がこの年代（150-250年頃）に行き着く。

近年、ヨゼフ・ヴァルザー氏も上にみた情報を丹念に吟味し、さらに仏像の特徴など考古学的証拠を利用してナーガールジュナの年代確定を試み⁹⁾、*Ratnāvahā*がシャータヴァー

⁹⁾ 本田義英 (1934) pp.1-97 では、漢訳の諸伝承にみられる、ナーガールジュナと関連付けられたいくつかの固有名詞を、サンスクリット名と比較、検討している。本田氏は、玄奘の『西域記』にみられる国王「婆多婆阿」および「引正」王、義浄の『南海寄帰内法伝』にみられる大国王「婆多婆阿」および「美士」国王、これらはすべて王朝名であるシャータヴァーハナ (*Śātavāhana*, *bDe byed*, *bDe spyod*) を翻訳したものであって特定の王の名ではなく、また *Śaṃrīkṣita* の求那跋摩による漢訳 (大正1872) にみられる「鞞陀迦」(**Dhyanataka*) 王と義浄の前掲書にみられる「市婆得迦」(**Jiyānataka*) はともに、シャータヴァーハナ朝の一大都市、あるいは首都であったターニヤカタ (*Dhānyakata*, 'Bras spuś) の転訛語の翻訳であって、こちらも特定の王名ではない、とする。さらにターナターインド仏教史にみられる *Utrayana* という王名については、「かの *Śātānka* が西蔵に於いて *Śātavāhana* と同一視され、而もその *Śātānka* が上述の伝説に依て知る如く、*Satāvika* の後裔としての *Udayana* に相当するところから、ここに種々の伝説や諸義の混雑から、ターナターへは依て *Śātavāhana* の一異名として *Udayana* 即ち彼れの所謂 *Utrayana* なるものが誤り伝えられたものではなからうか」(*ibid.* p.35.5-8.) といひ、*Udayana* や *Utrayana* は直接この王明とは関係のない名であるとする。そして結局、諸伝承からえられるのは王明名である *Śātavāhana* と都市名である *Dhānyakata* のみだといふ。

⁷⁾ 宇井伯壽 (1921) pp.5.6-9.5.

⁸⁾ 例えば、山崎元一 (2002) にこれまでの議論が紹介されている。

⁹⁾ Walser, J. (2002).

2. ナーガールジュナについて

ハナ朝のヤジュニヤ・シュリー (Yajña Śrī, ca.175-204) 王の治世に著されたものであるという仮説を立てるが、大筋では先に挙げた記述を越えるものではない。

またセイフオート・ルエグ氏も、諸情報を吟味した上で、ナーガールジュナの最盛期はシャータヴァーハナ朝とクシャーナ朝がインドを支配していた時期のいつかであるが特定することはほとんど不可能だとし、フラウヴァルナーその他多くの研究者の説に従って、150-200頃とする。一方、ラモット氏やメイ氏によって提案された243年誕生という年代は、鳩摩羅什の情報から複雑で仮定的な計算によって割り出されたものだとし、セイフオート・ルエグ氏は採用しない¹⁰⁾。

したがって現段階では、150-250年頃というのがもっとも妥当な、ナーガールジュナの想定生存年代だといえよう。

¹⁰⁾ Seyfort Ruegg, D. (1982) p.507.7-20; Seyfort Ruegg, D. (1981) pp.4-6.note 11.

3. 諸著作の真偽性

ナーガールジュナの諸著作に関して、インドの伝承ではチャンドラキールティが、**Mādhyanakāśāstrastutī*¹¹⁾においてそれらに言及している。

dīṣṭvā sūtrasamuccayaṃ parikathāṃ ratnāvalīṃ samstutūr
abhyasāciraṃ ca śāstra-gadītās tāḥ kārīkā yatnataḥ /
yukty-ākhyām aha ṣoṣṭikāṃ sa-vidalāṃ tāṃ sūnyatāśaptatīṃ
yā cāśv aṭha vighrahasya racitā vyāvartanī tām api // 10¹²⁾
 ここに脱かれるのは以下の 8 作品 [群] だと考えられる：

1. *Sūtrasamuccaya*
2. *Ratnāvalī*
3. *Stavas*
4. *Mūlamadhyamakakārikāḥ*
5. *Yuktiṣaṣṭikā*
6. *Vaidalyaparakaraṇa*
7. *Sūnyatāśaptatī*
8. *Vīgrahavyāvartanī*

これらのうちほとんどがこれまでナーガールジュナの真作とされてきたものであるが、1. の *Sūtrasamuccaya* (SS) と 3. の諸讃歌 (*Stavas*) が挙げられていることは、注目に値する。SS に関しては後にその項目でみていくように、近代の研究では現在に伝わるものは偽作と考えられており、そのためチャンドラキールティによるこの伝承は信憑性が疑われる。また、後者の諸讃歌に関してはセイフオート・ルエグ氏も注目しており¹³⁾、ラモツト氏はこれを *Stavas* ではなく *Catuhstana* (CS) とする¹⁴⁾。CS は 4 つの讃歌から構成されるものであるが、まとまった一つの作品としてはチベットに伝わっていた形跡がなく、漢訳にいたってはそれに含まれる個別の讃歌さえ翻訳されていない。そもそもナーガールジュナ作の讃歌は CS 以外にもあり、テキスト中の *samstutūr* が CS を指したものかどうかは疑わしい。さらに、チャンドラキールティは、その諸著作中で CS に含まれる偈頌をしばしば引用しているが、その際 CS の名は挙げないため¹⁵⁾、4 つのまとまったものとしての CS を知らなかったのではないかと思われる。したがって、ドク・ヨング氏が *les Louanges* と訳している¹⁶⁾ ように、これはナーガールジュナに帰せられる諸讃歌一般 (*Stavas*) を指したものと解釈するのが妥当であろう。

チベットではナーガールジュナの「論 [書] の集まり (rigs tshogs)」として 5 つある

11) このタイトルに星印 (*) をつけることに關しては: de Jong, J. W. (1984) p.228.38-39.

12) de Jong, J. W. (1962) p.51.1-4.

13) Seyfort Ruegg, D. (1981) p.8.18-25.

14) Lamotte, É. (1970) Introduction pp.XLIII.27-XLIV.9.

15) 引用があるのは、*La* 4, 5, 10, 11, 18, 21-23, 26, 27, №13 である。詳しくは: Lindtner, Chr. (1982) pp.125-127; 和稿 (2000) pp.27-31.

16) de Jong, J. W. (1962) p.55.38. ちなみにチベット歌では、*yan dag bstod pa* (p.53.30) と *samstutūr* の複数形は脱出されていない。

いは 6 つが言われる¹⁷⁾。ゲルク派の伝統では *Mūlamadhyamakakārikāḥ*, *Sūnyatāśaptatī*, *Vīgrahavyāvartanī*, *Yuktiṣaṣṭikā*, *Vaidalyasūtra*, *Ratnāvalī* の 6 つを挙げる¹⁸⁾。プトクン¹⁹⁾やサキヤ派では 6 つ目として *Ratnāvalī* ではなく **Vyavahārasiddhi* をとる²⁰⁾。また、前から 5 つまでをとって五論書とする場合もある²¹⁾。チベットではこの「論 [書] の集まり」に何をとり、どのような異論があったようである。しかしわれわれが注意しなければならないのは、これら 5 あるいは 6 の論書は、あくまでナーガールジュナの著作の中から「論書」に分類できるものを挙げたに過ぎない、ということである。例えば、コラムバ²²⁾やシャキヤ²³⁾の著作の分類として「理論の集まり」, 「讃頌の集まり (bstod tshogs)」, 「話の集まり (gram tshogs)」の 3 つを挙げる²⁴⁾が、ここで問題とされるのはこれらのうちの「理論の集まり」なのである。つまり、こうした論書ないし 3 分類をめぐる議論に出てくる諸著作のすべてが、チベットの伝承では真作と考えられていた様子が伺えるのである。しかし中にはその真作性が疑われるものもあり、そうした疑惑がこの 5 ないし 6 の論書を巡る議論の揺れを表わしているように思われる。ともにサキヤ派のコラムバ²⁵⁾やシャキヤ²⁶⁾の議論は、すべてが真作であることを前提とした上での諸著作の分類を巡るものであるが、ゲドゥントウプの議論²⁵⁾は、その「論書」という分類を巡るものを真偽性を巡るものにするに替えているようにも取れる。現代の研究ではセイフオート・ルエグ氏がこの 3 分類について分析している²⁶⁾。

現代の研究状況について、このチベットの 3 分類でいえば、「理論の集まり」と「話の集まり」に含まれる諸著作に関してはこれですでに研究が積み重ねられてきており、比較的解释が進んでいるが、「讃頌の集まり」に関しては CS 以外ではほとんど研究が進んでいないといえる。本論文では、前二者に関しては、多くを先行研究によりながら新たに気が付いた点にも触れつつ真偽性を検討したが、特に最後の諸讃歌に関して、それらの全容解明に力を注いだ。これら諸讃歌には校訂テキストの作成から始めねばならな

17) 詳しくは、ツルティム・ケサン (1986), 小林守 (1989) pp.9.7-11.8.

18) これを最初に主張したのはツォンカバ (Tson kha pa, 1357-1419): ツルティム・ケサン (1986) p.176.24-28. その後ではゲドゥントウプ (dGe 'dun grub, ダライラマーセ, 1391-1474): *ibid.* p.177.5-28.

19) Obermüller, E. (1931) pp.50.34-51.17.

20) これを主張するのは、「プトンの弟子で、レンダフ (Red mda' ba) の師でもあるサキヤ派のニヤオン=クンガバ (Ña dbon Kun dga' dpal): ツルティム・ケサン (1986) p.175.21-26. それ以後では同じくサキヤ派のコラムバ (Go ram pa, 1429-1489): *ibid.* pp.177.28-178.8. しかしこの **Vyavahārasiddhi* はゲドゥントウプによれば「空性を理論によって詳しく探求しているのではなく」、「*Jha sñad grub pa* という名称自身によっても空性を詳しく説いていないことは判る」。この作品「を」[中の理論の集まり]に数えることはアーチャールヤチャンドラキールティの考え方ではない」という 3 つの理由で除かれ、代わりに *Ratnāvalī* が 6 番目に入るのが正しいとされる: *ibid.* p.177.5-28. またサキヤ派でもシャキヤ²⁶⁾コグデン (Sākya mchog klan, 1429-1489) は、**Vyavahārasiddhi* を除いた 5 つを挙げる: 小林守 (1989) pp.10.24-11.5.

21) ターラナータは「五論理字書」に触れるが、それらの真体的著作名には言及しない。rigs pa'i tshogs *lia*: Schiefner, A. (1868) p.57.4; Schiefner, A. (1869) p.71.26.

22) ツルティム・ケサン (1986) pp.177.28-178.8.

23) *ibid.* pp.177.28-178.8.

24) 小林守 (1989) pp.10.24-11.5.

25) ツルティム・ケサン (1986) p.177.5-28.

26) Seyfort Ruegg, D. (1971) pp.448.4-449.21; Seyfort Ruegg, D. (1982) pp.509.24-510.38.

いものもあって、一部は内容解明への先鞭をつけるにとどまった感はあるが、「讃歌」という分野の重要性を改めて認識させられることとなった。これら諸讃歌には偽作と思われるものも多く含まれるが、讃歌研究の観点からは、内容が讃歌によって大きく異なり多彩であることが注目される。それゆえ、今後は神話、仏伝文学、密教文献など各分野の、専門的視点からの解明も望まれる。

真偽性の判定に際しては、リントナー氏²⁷⁾をはじめトーラとドラゴネッティ両氏²⁸⁾らがそうしているように、大きく内的根拠と外的根拠の二つに基づいて行う。内的根拠とはテキスト自体に基づくもので、作品中に説かれる思想や哲学、あるいは使用語句、韻律、構成などのことである。テキストはサンスクリットを基準とするが、サンスクリットの残されていない作品も多く、その場合はチベット訳、漢訳を利用してできる限りとのサンスクリットを想定した分析を行う。外的根拠とはテキスト以外から得られる情報のことで、他の作品にみられる引用、奥書の記述、歴史書などにみられるチベットや中国での伝承などを指す。しかし実際は、ナーガールジュナの諸著作を引用する文献としてはチャンドラキールティ以後のものが多く、チャンドラキールティは、トーラとドラゴネッティ両氏も述べるように、ナーガールジュナと時代的にかなり隔たっており信頼性が必ずしも高くないこと、またデンカルマ目録、チベット訳の奥書、歴史書の記述なども早くとも8世紀以降で時代的にかなり隔たっていることから、多くの場合、外的根拠は決定的なものとはなりにくい。このことからわれわれは特に内的根拠を重視し、できるだけテキストに即して問題点を指摘することによって、著者の解明に当たらざるをえない。

²⁷⁾ Lindtner, Chr. (1979*); Lindtner, Chr. (1982); Lindtner, Chr. (1983).

²⁸⁾ Tola, F. and Dragonetti, C. (1998).

3.1. Catuhstava

CSとは、*Lokāṭastava* (Ls, P no.2012), *Nirauṇamastava* (Ns, P no.2011), *Acintya-stava* (As, P no.2019), *Paramārthastava* (Ps, P no.2014) の4つの讃歌から構成される讃歌集である。サンスクリットが存在するほか、チベット訳が讃歌ごとに大蔵經に収められているが、漢訳は存在しない。

研究史

CS研究の端緒はドゥ・ラ・ヴァレ・ブサン氏の *Bodhicaryāvatāra-parīkā* (BCP) の校訂出版³⁰⁾にある。この *Bodhicaryāvatāra* の注釈書には5つの偈頌が *catuhstave* として引用されている³¹⁾。ドゥ・ラ・ヴァレ・ブサン氏は、これら5偈がチベット大蔵經にある2つの讃歌のものであることを確認した。その2つは *Nirauṇamastava* と *Lokāṭastava* である³²⁾。同氏は、CSを異なるタイトルをもった4つの讃歌の集まりだと考え、残り2つの讃歌を、チベット大蔵經で *Ns* と *Ls* の直後にあり、同一の翻訳者³³⁾によって訳されていることから、*Cittavajrastava* (Cs, P no. 2013) と *Paramārthastava* だとした³⁴⁾。

1980年代にトウチ氏は、Nsの注釈付きサンスクリット写本とPsの注釈付きサンスクリット写本を発見し、本文である偈頌部分のみを校訂出版した³⁵⁾。残り2つの讃歌はこの写本には失われている (missing) とされているが、もともとCSとして4つの讃歌の揃った1つの写本であったのかどうかは不明である。この点は、後にサンスクリット写本の情報を挙げる個所で触れることとする。同氏はCSを構成する讃歌をドゥ・ラ・ヴァレ・ブサン氏と同じく *Ns*, *Ls*, *Cs*, *Ps* とし、形態 (style) が *Mūlamadhyamakārikā*

²⁹⁾ 拙稿 (2002) p.211-9.7 をもとにまとめた。

³⁰⁾ de La Vallée Poussin, L. (1901-1914).

³¹⁾ *ibid.* pp.420.1, 488.17, 533.8 に *catustave(sic)* とあり、その後引用が続く。この 'catustava' という語を欠いた表記はネパール写本の写本である。Brough, J. (1964) p.360.34: *Nepalese manuscripts are decidedly poor witnesses for anusvara and visarga*。同氏はこの校訂本の Introduction で、中心とした写本は *the Nepalese character* からなることを述べており、これは同氏の使用した写本がネパール写本であることを示している。従ってここでは、'catustava' という表記を用いる。なお、Tola, F. and Dragonetti, C. (1985) p.39.note 1 では 'catustava' という表記に關して、文法的な観点からは 1. *catustava*, 2. *catustava*, 3. *catustava* の3つが可能であることが示されている。彼らは Patel, P. (1932), Patel, P. (1934) の表記に従って 3. *catustava* を採用しているが、その根拠は示していない。バテル氏もその表記を採った根拠を上記2研究で示していない。

³²⁾ de La Vallée Poussin, L. (1901-1914) p.420.2-3 に *Ns*7, p.489.1-2 に *Ns*9, p.533.9-14 に *Ls*18, 19, 20 が引用されている。また、ここでは触れられていないが、p.573.11-13 に *As*25 に類似したものと *As*36 が引用されている。CSの他文献にみられる引用については Lindtner, Chr. (1982) pp.125-127 および Tola, F. and Dragonetti, C. (1985) pp.40-44 に具体的な引用箇所が示されている。

³³⁾ P, D, N, C, S の奥書きによると、Ns, Ls, Ps の翻訳者はいずれも、インド人学者 Kṛṣṇapaṇḍita とチベット人翻訳僧 Tshul khrims rgyal ba の2人であるが、Csの翻訳者に関しては記載がない。唯一、Dの東北目録にはCsの翻訳者として先の2名が挙がっている。

³⁴⁾ de La Vallée Poussin, L. (1913).

³⁵⁾ Tucci, G. (1932).

(MK)と同じこと、チャンドラキールティ(Candrakīrti)が *Prasannapādā* (PP)で *Is* を *ācāryapādāni*³⁶⁾として引用していること、2点から、CSはナーガールジュナの真作であるとした。また *Advayaśāstrasamgraha* (AS)にも *Ns* が引用されている³⁷⁾ことを指摘する。

一方、パテル氏³⁸⁾はチベット大蔵経でナーガールジュナに帰せられている諸讃歌を検討して、*Ns* と *Is* 以外の残り2つの讃歌の確定を試みている。同氏は第三の讃歌について、BCPにそれと似た讃歌がいくつか引用されていること、それが内容的に *Cs* や *Ps* よりも *Ns* や *Is* に類似していることから、*Acintyastava* だとした。そして第四の讃歌については、*Ns*, *Is*, *As* と同様に中観の様々な理論を扱っていること、チベット大蔵経で *As* の直後にあって同じ翻訳者によるものであることから、*Śrūtyāstava* (*Ss*, P no. 2020)とした³⁹⁾。そして *CS* の4つの讃歌の順序をひとまずチベット大蔵経所収の順に、*Ns*, *Is*, *As*, *Ss* とした。作者については、チャンドラキールティやプラジュニヤカラマティ(Prajñākaramati)、アドヴァヤヴァジュラ(Advayavajra)やチベット人翻訳者がナーガールジュナとしてしていることから、真作とみている。さらに *CS* の成立過程について、2つの可能性を考えている。1つは、もともと独立した作品であったいくつかの讃歌が後に集められ、そのうち4つが写本に写され、そしてその写本をプラジュニヤカラマティが見て1つの作品と誤解した、というもの。もう1つは、もともと *CS* という名の1つの作品があったが、それらが個々の讃歌(あるいは章)の名で呼ばれるうちに4つの独立した作品だと思われるようになった、というものである。

1950年代にはトウッチ氏が、アムリタカラ(Amṛtākara)による注釈書 *Catuhstava-samāsārtha* を発見し、校訂出版した⁴⁰⁾。これは *Ns*, *As*, *Ps* のそれぞれの名のもとにそれぞれを注釈として著されたものである。写本の冒頭部分は欠落しているが、トウッチ氏はそれを *Is* だと推定した。この注釈書の発見により、*CS* の4つとその順序は、*Is*, *Ns*, *As*, *Ps* であることが推定されたこととなる。つまり、BCPでの引用から *Is* と *Ns* が *CS* に含まれることが確定され、アムリタカラの注釈から *Ns*, *As*, *Ps* がこの順序で *CS* に含まれることが確定されるからである。*CS* の成立について同氏は、プラジュニヤカラマティ時代のインドでは1つの作品として考えられていたが、チベット人翻訳者ツルディムグルフ(Tshul khrims rgyal ba: Jayasīla)とインドル共訳者クリシュナパンディタ(Kṛṣṇapaṇḍita)は別々の4つの作品と考えた、としている。

その後、酒井紫明氏は、*Ns*, *Ps* に関してはトウッチ氏のサンスクリット、チベット両

36) de La Vallée Poussin, L. (1903-1913) p.413.5 に *ācāryapādāni* とでてくる。それに続いて *Is*4 が引用されている。

37) Śaestri, M. H. (1927) p.1.12-13 に *Ns*24, p.22.2-3 に *Ns*21, p.22.8-9 に *Ns*7, また p.22.1 に *nāgārjunapādāni* (sic) *apy ukta* という記述がある。

38) Patel, P. (1934).

39) ナーガールジュナの他の諸讃歌に関してパテル氏は、*Cs* を、*CS* の他の3つの讃歌にはみられるような仏の特性に直接触れていないし、中観の理論にも触れていないことから除き、*Ps* と *Nirvāṇastava* (P no.2021) を *CS* の他の3つの讃歌とは構造(construction)が違っており、仏の特性への讃歌でそれぞれが綴らわっていることから除き、*Sattvārādhanaṣṭava* (P no.2017) を、*CS* の他の3つとは異なる韻律(meter)で構成されていることから除いた。

40) Tucci, G. (1956).

校訂テキストを利用しての日本語訳、*Is*, *As* に関しては大蔵経のチベットテキストのみからの日本語訳、加えてアムリタカラの注釈の日本語訳を発表した⁴¹⁾。同氏は *CS* の成立について、チベット人翻訳者の時代で少なくとも1038年にはまだ *Catuhstava* という呼称はなく、アムリタカラの生存年代を考慮して、13世紀のインド仏教の末期頃に *Catuhstava* と呼ばれていた、とする⁴²⁾。

またセイフオート・ルエグ氏は、ナーガールジュナの諸讃歌に関して概説を書いてきた。ここでは *CS* については深く立ち入らず、ナーガールジュナの著作の可能性のある讃歌ということで、*Ns* や *Ps* や *Dharmadhātustava*⁴³⁾ (P no.2010) から、そこに説かれる中観の思想について概説している。

1980年代、リントナー氏は *CS* としてまとめた、4つのサンスクリット写本のコピー等入手し、*Is* と *As* を校訂出版した⁴⁴⁾。これによって *Is*, *Ns*, *As*, *Ps* の校訂サンスクリットが揃った。テキストに関しては近年、ナムドラル氏が、トウッチ氏やリントナー氏が用いたものとは異なるサンスクリット写本を用いて校訂したテキストを、出版した⁴⁵⁾。ここにみられる新しい読みの特徴は後に述べることにする。リントナー氏は、*Catuhstava* への最も古い言及はヴァイローチャナラクシタ(Vairocanaśīta)の *Bodhisattvacaryāvatāra-panjikā* (BSP)⁴⁷⁾であるとしているが、年代的にみてもプラジュ

41) 酒井真典(紫明) (1959).

42) 酒井氏は海井典典(紫明) (1959) pp.3-4において、チベット人翻訳者ツルディムグルフ(Jayasīla)は「チベット仏教史上の有名な Atiśa を印度からチベットにお供して連れていった人であって、その年は Waddell によれば A. D. 1038 年に当ると言われているからこの頃にはまだ此等の讃を四篇とはまとまってはいなかったようである。」また、「無著の偈を Advayavajra が *Advayaśāstrasamgraha* に引用している場合には同様な語を用いず、*nāgārjunapādāni* *apy ukta*」なる語を用いていることに對し、「Advayavajra は Bhattacharya の推定によると10世紀の後半から11世紀の前半に生存した人のようであるから、この時代にはまだかかる呼称がなかった」としている。また、トウッチ氏が Tucci, G. (1956) p.237.18-22において、アムリタカラについて、「インドで仏教が圧迫され衰微した頃チベットに逃れた、多くの Pandita のうちの一人ではないか」としていることから、「回教徒の侵入によってチベットに逃れた人と見れば大体 A. D. 13 世紀の中頃に生きている人ではなかろうか。」としている。また BCP とその著者プラジュニヤカラマティについては、その「成立もあまり早い方ではなく著者の生存年代もこのへんに落ち付くのではなかろうか」としている。

43) Seyfort Ruegg, D. (1981) pp.31-32.

44) セイフオート・ルエグ氏は Seyfort Ruegg, D. (1981) p.32.3-13 で、*Dharmadhātustava* を、*CS* には含まれないが、仏教の伝承や現代の研究者たち(S. Schayer, C. Reganney, K. Venkata Ramanan, R. H. Robinson)によってナーガールジュナに帰せられている、とし、一見、密教思想との関わりがあるかのような印像を受けるが、たとえナーガールジュナの作品ではないとしても、少なくとも作品の中核が中観派の初期のものである可能性は否定できない、としている。

45) Lindtner, Chr. (1982).

46) Nandol, G. (2001).

47) P no. 5277. Śa169a2-3 に *Is*20d *pa bāi pa las kyāni* とあり、それに続いて *Ns*7 が引用されている。また、Śa174b8-178a1 に *Is*20d *pa bāi pa las kyāni*、続いて *Ns*9 が引用されている。しかしこれらは引用の導入文を含め、BCP が *CS* を引用している箇所と一致しているもので、BSP に用いるこれらの引用箇所は BCP からの索引きであろう。ちなみに BSP には、これも BCP と引用の重複する *Is*4 の引用もあるが(Śa183b3)、その引用の導入文には *de skad du gñi* としかなく、これも BCP のもの (*tad ukta*) と類似した記述である。こうした引用の重複に関しては、江島恵教(1996)に詳しい。したがって、*Catuhstava* への最も古い言及はプラジュニヤカラマティによる BCP においとまられていると言うべきである。

ニャカラマティの方が古いため、正しくは後者による *BCP* といわねばならない。作者については、教義 (doctrine) と形態 (style) が、特に *Ls* と *As* は *MK* 等と一致するので、ナーガールジュナであるとしている。しかし一方では、記述内容に一步踏み込んで、思想的な問題点があることにも触れている。それは、*As45* に唯識派の三性説がみられるというものである⁴⁸⁾。そしてその *As45cd* は、唯識の思想がみられる *Larikāvatārasūtra*⁴⁹⁾ (*LAs*) にほぼ同じ記述がある。

As45cd: nāsti vai kalpitō bhāvo paratantras tu vidyate ||

LAs II-191ab: nāsti vai kalpitō bhāvo paratantras ca vidyate |

リントナー氏はこの *As* の箇所を、*LAs* から引用したもので、それはまさに三性説であるとしている。そしてナーガールジュナは *LAs* を通じて三性説を知っており、著者間題には影響しない、と述べる⁵⁰⁾。この、ナーガールジュナが *LAs* の三性説を知っていた、という見解はどうい受け入れられるものではなく、この点は本論文の *As* の項目で扱うこととする。

ポール・ウィリアムズ氏はリントナー氏のこの出版に対して、書評を書いている⁵¹⁾。同氏は *As45* の問題に関して、リントナー氏とは異なる帰帰解釈をしてナーガールジュナの思想と矛盾しないとするが、問題の箇所が現行以前の *LAs* テキストから *As* に引用されたものだとする点には、問題がある。この点も後に触れる。

またトータとドラゴネッティ両氏は、*As45* に関しては、サンスクリットとは異なるチベット訳の読みをとって、三性説とは関係ないとする⁵²⁾。しかし、チベット訳の読みであっても、三性説との関わりが全くなくなるわけではない。この部分のチベット訳と、想定されるサンスクリットは、

As45cd: brāgs pa'i dños po med pa ñid || gñan gyi dban ni yod ma lags ||

→ nāsti vai kalpitō bhāvo paratantra *na vidyate ||

そのほかの研究者では斎藤明氏が、今までの研究をふまえた上で、残された問題点を3点指摘している⁵³⁾。1つは、なぜ *Ls*、*Ns*、*As*、*Ps* が後代 *CS* と総称されるに到ったか、というもの。これはいまだ未解決である。2つ目に、サンスクリットは帰帰数、内容に関してチベット訳と若干の隔たりがみられるがなぜか。この点も未解決である。両テキストの違いは、後に表にして示すことにする。3つ目として、*As45* は唯識派の三性説とパラレルなものがあるが、それはどう説明すべきか。この点は *As* のところで扱う。また八力広喜氏による *Ls* と *As* の日本語訳⁵⁴⁾、および *Ls* と *As* の思想を *MK* と比

⁴⁸⁾ Lindtner, Chr. (1982) p.122.note 149. この問題に関してはニューリー氏がすでに指摘している: Gnoli, B. (1961) p.12.8-17. 同氏はトカッチ氏の校訂サンスクリットに基づいて *Ns* と *Ps* を、大藏經のチベット訳に基づいて *Ls* と *As* をイタリア語訳している。*As45* の箇所に関しては、同氏はチベット訳しか見ていない点には、注意が必要である。

⁴⁹⁾ Nanjio, B. (1923).

⁵⁰⁾ Lindtner, Chr. (1992) p. 253.12-20.

⁵¹⁾ Williams, P. (1984).

⁵²⁾ Tola, F. and Dragonetti, C. (1985) p.49.note 191.

⁵³⁾ 斎藤明 (1986).

⁵⁴⁾ 八力広喜 (1986*).

較して考察した研究⁵⁵⁾がある。前者の日本語訳は既存の校訂サンスクリットからの翻訳である。後者では同氏は *As45* の問題の箇所を「唯識三性説における通計所執性と依他起性のもつ性質をのべているものと考えてよいであろう。」(p.120.6-8) としているが、「ナーガールジュナが三性説を知っていたという見解には、われわれも同意しかねる。」(p.120.18-20) とし、問題は未解決のままである。

トータとドラゴネッティ両氏⁵⁶⁾は今までの研究を詳細にまとめている。著者に関しては、*Ls* は *PP* に *ācāryopāda* 作とありナーガールジュナ作と考えられること、*Ns* は *AS* にナーガールジュナ作として引用されていること、*Ls* と *As* は *BCP* での引用のされ方からナーガールジュナ作だと考えられること、チャンドラキールティは **Madhyamakāśāstrasthā* でナーガールジュナの著作を列挙しているが、その中に 'samstuti' という名で諸讃歌が含まれていること、Lindtner, Chr. (1982) で用いられている東大写本と Gokhale 写本には4つの讃歌ともナーガールジュナ作と明記されていること、チベット大蔵經でも4つの讃歌をそれぞれナーガールジュナ作としていること、さらに扱った内容的にもナーガールジュナの思想の核が述べられていること、以上により *CS* の著者はナーガールジュナであるとする。また *CS* の成立過程に関して、

1. 実際にナーガールジュナによる独立した1つの作品であったが、チベット訳の際に別々に訳された。

2. ナーガールジュナによる *CS* という独立した作品はなく、ナーガールジュナ以後でプラジュニャカラマティやアムリタカラ以前に、誰かの手により *CS* という名のもとに一つにまとめられた。

という2つが考えられるが、

a. ナーガールジュナによる *CS* という独立した作品があったならチベット訳されないはずはなく、大蔵經に入っているはずである。

b. 4つの讃歌は別々に出回っており、より大きな作品の一部であるという示唆もなされていない。

このことから、*CS* はもともと別の作品であった、という2.の説をとっている。しかし2通りの成立過程のうち、前者に関しては、4つの讃歌が独立したもののみなされたのが「チベット訳の際」であるとは限らないであろう。また著者に関しては、成立過程とは別に検討すべき問題であり、ここでは触れるべきではない。したがって、これらをもう少し正確に書き直せば、次のようになる。

1. もともと *CS* という1つの著作があったが、4つの章がそれぞれ独立したものと誤解され、別々に出回った。

2. もともと独立していた4つの讃歌が後に1つにまとめられ、*CS* と呼ばれるようになった。⁵⁷⁾

⁵⁵⁾ 八力広喜 (1986).

⁵⁶⁾ Tola, F. and Dragonetti, C. (1985).

⁵⁷⁾ 拙稿で挙げた第3の可能性、「3. もともと独立していた4つの讃歌が後に *CS* としてまとめられ、ある特定の時代、あるいは特定の地域のみで知られていた。あるいは、このようにして後にまとめられた *CS* は1つの作品として広く認められてはいなかった。」(拙稿 (2002) p.7.6-8) は、ここに

これらのうちいずれをとるべきかについては、次の3点の考察がポイントとなる。

- a. *CS* として出回っていた形跡。‘Catuḥstava’ という題名が確認できる最古のものは10世紀後半から11世紀初期のプラジュニャーカラマティ⁵⁸⁾による記述で、それ以降では13世紀のアムリターカラによる *CS* の注釈書⁵⁹⁾に ‘Catuḥstava’ という呼称が確認できる。そのほか、注釈付きのものを含めた *CS* のサンスクリット写本が、7本⁶⁰⁾存在する。ただしこれら諸写本の筆写年代は、かなり後代である。
- b. 単独の讃歌として出回っていた形跡。現在のチベット大蔵経にはそれぞれ独立した作品として4つの讃歌が収められているのみで、*CS* としては収められていない。 *Is*, *Ns*, *Ps* の釈出時期は11世紀⁶¹⁾。 *As* と、 *Ps* の異訳として *Āryabhatīṭāra-kamāñjīśrī-paramārthastuti* (*Ps**, P no.2022) が存在するが、それら2讃歌の釈出時期はさらにそれ以降で12世紀前半までと推定される⁶²⁾。また、デンカルマ

含まれるべきなので、成立過程の可能性としては3つではなく、以上の2つに訂正する。

⁵⁸⁾ 彼の生存年代は10世紀後半から11世紀初めと推定される。歴史書には「Canaka王」の時代の「大賢門のうちの」「南門の守護者」(『Taraūṭha 印度史』(1928) p.318.5; Chattopadhyaya, D. (1970) pp.294-296.) あるいは「西門の守護者」(『青史』, the six gate-keeper-panḍitas (of Vikramastā): ... at the western gate - Śeṣ-rab 'byun-grus blo-gros (Preṣṭhākaramatī): Naudou, J. (1968) p.206.1-4.) という記述がある。諸研究者によって挙げられている年代は、A. D. 950-1000頃 (Seyfort Ruegg, D. (1981) p.116.8.), 11世紀 (Steinkellner, E. (1981) p.19.28.), A.D.1078頃 (Murti, T. R. V. (1955) p.101.note 2.), A.D.775-825 (Vaidya, P. L. (1960) Introduction p.10.33-38.) とあるが、いずれにもその根拠は示されていない。年代の推定を多岐にわたる研究には 田村博洋 (1971), 白岩輝成 (1985) (p.78.25; 「10世紀から11世紀にかけて活躍した学匠といえよう。」) があるが、年代の推定にはさらなる調査が必要である。

⁵⁹⁾ Tucci, G. (1956) における注釈書の最後に、Catuḥstava-samāsārthah (p.246.6.) とある。アムリターカラの生存年代については、西井真典 (崇朝) (1959) p.4.8-13 を参照。この生存年代も確定的なものではない。

⁶⁰⁾ これらの詳細は以前拙稿でも触れたが、本論文でも後に扱う。拙稿 (2003*) p.107.14.

⁶¹⁾ 羽田野伯献 (1954) pp.21-22 によれば、チベット人翻訳者 Tshul khriṃs rgyal ba は Nag tsho と呼ばれ、Atiśa をインドへお供して迎えたチベット人翻訳者であり、Atiśa のもとで長い間学んでいいる。『青史』(Roerich, G. N. (1949) p.328.15-17) によれば、この Nag tsho は 1011 年の生まれである。また 1716 年に作成された 'Jam dbyans bzad pa によるチベット年代記には、1037 年に Nag-tsho lo-tāḥ-ba arrived to invite Jo-bo (Atiśa) (Chattopadhyaya, A. (1993) p.3.24.) という記述がみられる。したがって、釈出時期は11世紀中と推定される。

⁶²⁾ *As* に関しては、P と N の目録には翻訳者の名前は挙げられていないが、D の目録及びブトウンの目録には翻訳者として Tlaka と Pa tshab ni ma grags の名が挙げられている。 *Ps** の翻訳者も同じ後二人。 Patel, P. (1934) p.89.6-11 によると、Tlaka は Tilakabāśa と呼ばれるカシュミールの学者であり、Pa tshab ni ma grags は Sūryakīrti と呼ばれるチベット人翻訳者で、彼らは Kṣapaṇḍita と Tshul khriṃs rgyal ba よりも後の時代の人々であるという。1716 年に作成された 'Jam dbyans bzad pa によるチベット年代記によると、Pa tshab ni ma grags は 1055 年の生まれ (Chattopadhyaya, A. (1993) p.10.7-8.). Pa tshab ni ma grags の年代に関しては以下のものを参照した。Lang, K. C. (1990), pp.133-135; van der Kuip, L. W. J. (1985) p.4.12-14; Roerich, G. N. (1949) pp.272.4-272.28, 341.34-343.26.

目録 (824 年)⁶³⁾ とパンタンマ目録⁶⁴⁾ およびブトウンの目録 (1322 年)⁶⁵⁾ にも *CS* という著作はなく、それぞれ独立した作品として4つの讃歌が記載されている。他の文献における *CS* の引用に関しては、引用の際に典拠として *CS* ではなく個々の讃歌名を挙げるものが多い。引用に際して ‘Catuḥstava’ と明記するのはインドの文献である *BCP* と *BSP* のみである。このように、チベットにおいては *CS* が存在していた形跡がない。また、*Is* 単独のテキストで “Dharaṇīsaṃgraha” に記入したものがあ⁶⁶⁾。

- c. 伝承の相違。プラジュニャーカラマティの時代 (10 世紀後半から 11 世紀初め) およびアムリターカラの時代 (13 世紀) に ‘Catuḥstava’ という呼称がみられるが、11 世紀 (*Is*, *Ns*, *Ps*) とそれ以降 12 世紀前半まで (*As*, *Ps**) にチベット訳された際には、独立した讃歌として4つが別々に翻訳され、大蔵経に収められている。またチベットの著作で *CS* 中の偈頌が引用される場合、*CS* と明記するものはない。

a. b. をもとに考えると、上の 2. の可能性が最も高いと考えられ、ナーガールジュナの諸讃歌がプラジュニャーカラマティの時代あたりに一つにまとめられたと思われる。しかし、c. にあるようにチベットでの伝承に問題が残る。チベットでは *CS* が存在していた形跡がないことを考慮すると、*CS* という作品は、インドのごく一部の地域でのみ知られていたに過ぎないのかもしれない。したがって、これらを総合して考えると、もともと独立して存在した4つの讃歌が、プラジュニャーカラマティの時代 (10 世紀後半から 11 世紀初め) あたりにインド (あるいはごく限定された地域) で一つにまとめられ *CS* と呼ばれたが、それはチベットには伝わらず、4つが別々に単独の讃歌として伝わった、とみるのが妥当であろう。

そしてそうである限り、著者に関しては、個々の讃歌ごとに検証していかなければならない。

またその他の問題点として、斎藤明氏も指摘しているように、サンスクリットと大蔵経のチベット訳とを比較したとき、内容が一致しない箇所がある上に、*Is* と *As* においては総偈頌数も一致しない。すなわち、*Is*15, 16, *As*13, 25 はサンスクリットは存在するがチベット訳が存在しない。またチベット訳は1偈あたり7音節4句からなるが、*Is*26, *As*23, 53, *Ps**2, 10 の5偈は7音節3句からなり、*Ps**1 は7音節5句からなる。

次ページには、こうしたサンスクリットとチベット訳の違いを、いくつかの表にして、示した。

⁶³⁾ Lalou, M. (1953) pp.313-353, esp.326.13-16. この目録の成立年代は 824 年。(cf. 山口瑞鳳 (1978) pp.18-20.) この目録に関しては 御牧克己 (1987) pp.280.12-281.4 に簡潔にまとめられている。また、成立年代に関しては 836 年を主張する説もあるが、それらに関しては以下の研究を参照した。原田寛 (1982), 原田寛 (1983*), 原田寛 (1985), 羽田野伯献 (1983), また以上の2つの説をめぐる論争が 山口瑞鳳 (1985) にも見られる。

⁶⁴⁾ 民族出版社 (2003), 川越英真 (2005), 川越英真 (2005*).

⁶⁵⁾ この目録に関しては 御牧克己 (1987) pp.281.18-282.14 に要領よくまとめられている。ブトウンによって 1322 年に著わされた仏教史目録部は、西岡祖秀 (1981) p.65.5-18 を利用し、1362 年に著わされたテンギンギョルのみの目録は、越智淳仁 (1980) を利用した。

⁶⁶⁾ 『梵典 III』 p.140.5-14 に、いわゆる “Dharaṇīsaṃgraha” に記入した3つの *Is* のサンスクリット写本の存在が報告されているが、これら以外にも発見されたので、後にまとめる。

<サンスクリットとチベット訳で完全には一致しない偈頌>

- Ls* – 14, 18, 19, 24.
Ns – 10, 12, 13, 15.
As – 9, 10, 14, 16, 18, 32, 33, 34, 35, 42, 45, 49, 56.
Ps – 特になし。
*Ps** – 1, 6, 7, 8, 9, 10, 11.

<サンスクリットとチベット訳の比較>

記号 ○：一致する
 ※：一部が異なる
 ×：欠けている
数字：句数（4以外のもの）

<i>Ls</i> (Skt.)	1-13	14	15	16	17	18	19	20-23	24	25	26	27-28
(Tib.)	○	※	×	×	○	※	※	○	※	○	3	○

<i>Ns</i> (Skt.)	1-9	10	11	12	13	14	15	16-25
(Tib.)	○	※	○	※	※	○	※	○

<i>As</i> (Skt.)	1-8	9	10	11-12	13	14	15	16	17	18	19-22	23	24	25
(Tib.)	○	○	※	※	○	×	※	○	※	○	※	○	3	○

	26-31	32	33	34	35	36-41	42	43-44	45	46-48	49	50-52
	○	※	※	※	※	○	※	○	※	○	※	○

	53	54-55	56	57-59
	3	○	※	○

<i>Ps</i> (Skt.)	1-11
(Tib.)	○

<i>Ps*</i> (Skt.)	1	2	3-5	6-9	10	11
(Tib.)	5	※	3	○	※	3

<讃歌ごとの偈頌数および4讃歌の順序>

	<i>Ls</i>	<i>Ns</i>	<i>As</i>	<i>Ps</i>	<i>Ps*</i>	順序
<i>Catuhstava</i> (Skt.)	28	25	59	11	(11)	<i>Ls, Ns, As, Ps</i>
チベット大蔵経 (11~12世紀)	26	25	57	11	11	<i>Ns, Ls, Ps, As, Ps*</i>
プトウンの目録 (1322年)	22	25	50	10	偈頌数欠如	<i>Ns, Ls, Ps, As, Ps*</i>
バンタンマ目録	22	25	50	10	訳出なし	<i>As, Ls, Ns, Ps</i>
デンカルマ目録 (824年)	22	25	50	10	訳出なし	<i>As, Ns, Ls, Ps</i>

注) 敦煌出土チベット語文献目録⁸⁷⁾には、*CS* としてまとめたものも、
独立した作品としての *Ls, Ns, As, Ps, Ps** も、記載がない。

⁸⁷⁾ Lalou, M. (1939, 1950, 1961); de La Vallée Poussin, L. (1962).

引用文献

CS に含まれる偈頌は多くの著作に引用がなされている。今までの研究で指摘された引用文献⁸⁸⁾と、それに加え、未だ指摘されていない引用文献⁸⁹⁾をここに挙げる。今までの研究で指摘のない引用箇所には*をつけた。これら諸文献に関して使用したテキストは、「略語および参考文献」において、文献の正式名の後に示した。また、それらで引用された部分のテキストは「*Catuhstava* テキスト」中で脚注に挙げた。

これらのうち、引用に際して '*Catuhstava* (bstod pa bāi pa)' の記述が見られるのは、*BCP*⁷⁰⁾、*BSP*⁷¹⁾ であり、ナーゲルジュナ作あるいはそれを暗示する記述の見たれるものは、*AS*⁷²⁾、*BMP*⁷³⁾、*CP* (*rje btsun gyi ḥal sñia nas kṛis*)⁷⁴⁾、*CG*⁷⁵⁾、*MA* (*slob dpon gyi ḥal sñia nas kṛis*)⁷⁶⁾、*MP*⁷⁷⁾、*MU* (*slob dpon gyi ḥal sñia nas*)⁷⁸⁾、*PP* (*ācāryapādāḥ*)⁷⁹⁾、*PS* (*slob dpon gyi ḥal sñia nas kṛis*)⁸⁰⁾、*TR*⁸¹⁾、*TSS*⁸²⁾、*TSS*⁸³⁾ である⁸⁴⁾。*CS* の注釈書である *Catuhstavasamāsārṭha* には、'*Catuhstava*' という記述⁸⁵⁾ はあるが、著者に関する記述はない。また、*CS* としての4つの讃歌のそろっているものとしては、Lindtner, Chr. (1982) で用いられている東大写本 (W)、モンゴル写本 (M)、Gokhale 写本 (G)、カトウマンドウ写本 (W)、さらに Namdol, G. (2001) での2本 (Ka と Kha)⁸⁶⁾ がある。これらのうちナーゲルジュナ作という記述は東大写本 (個々の讃歌に対して) も *CS* としてまとめたものに対してもその記述が見られる。)、Gokhale 写

⁶⁸⁾ 引用文献については、Tola, F. and Dragonetti, C. (1984) pp.40-44 および Lindtner, Chr. (1982) pp.125-127 に具体的に挙げられている。
⁶⁹⁾ このうちの多くを宮崎崇正よりご指摘いただいた。この場を借りて謝意を表したい。
⁷⁰⁾ de La Vallée Poussin, L. (1901-1914) pp.533.8, 420.1, 488.17: 3箇所ともに *catustane*(sic). *BCP* の校訂テキストリットは de La Vallée Poussin, L. (1901-1914) を中心に使用し、Vaidya, P. L. (1960) と Śāstri, S. D. (1988) も参考にした。後者2つは、前者より多くの写本を見ているが、写本そのままでの誤りの情報が欠けているように思える。
⁷¹⁾ P no.5277, Śa169a2, Śa174b8: 2箇所とも *betod pa bāi pa las*.
⁷²⁾ Śāstri, M. H. (1927) p.22.1: *nāgārjunapādātr*(sic) *apy uktam*.
⁷³⁾ *BMP*: *Bodhinārgapradīpa-paṇḍitā*, P no.5344, K1284a5: *slop dpon 'phags pa kṛu sgrub kṛi ḥal nas* (sic) *kṛiṇi*.
⁷⁴⁾ *CP*: *Caryāmelāpākaprādīpa*, P no.2668, G1104a8.
⁷⁵⁾ *CG*: *Caryāṅgikāśa-nṛti*, Kverne, P. (1977) p.190.34: *nāgārjunapādāḥ*.
⁷⁶⁾ *MA*: *Madhyamakāvatāra-bhāṣya*, de La Vallée Poussin, L. (1907-1912) p.23.11.
⁷⁷⁾ *MP*: *Madhyamakaratnagradīpa*, P no.5254, Tsha327a2-3: *slob dpon 'phags pa kṛu sgrub kṛi ḥal mīa* (sic) *nas*, Tsha327a5: *slob dpon 'phags pa kṛu sgrub ṇid kṛi ḥal sñia nas kṛiṇi*, Tsha361a4: *slob dpon ṇid kṛi ḥal sñia nas*.
⁷⁸⁾ *MU*: *Ratnakaraṇḍogghāṇanāma-madhyamakopadeśa*, P no.5325, A124b7.
⁷⁹⁾ de La Vallée Poussin, L. (1903-1913) p.413.5.
⁸⁰⁾ *PS*: *Pañcaskandhaprakaraṇa*, Lindtner, Chr. (1979) p.120.26.
⁸¹⁾ *TR*: *Tattvaratnāvalī*, 梶山雄一, 御牧寛己 (1986) p.17.8: *kṛu sgrub kṛi ḥal sñia nas kṛiṇi*.
⁸²⁾ *TSS*: *Tattvasiddhīnāma-prakarana*, P no.4531, Nu30b3: *slob dpon nāgārjuna i ḥal sñia nas kṛis*.
⁸³⁾ *TSS*: *Tattvasārasaṅgraha*, P no.4534, Nu105a6-7: *slob dpon kṛu sgrub kṛi ḥal sñia nas kṛis*, Nu102a1: *'phags pa kṛu sgrub kṛis*.
⁸⁴⁾ これらのうち *MU* と *TR* における引用は今までの研究で言及されていない。
⁸⁵⁾ Tucci, G. (1956) p.246.6: *catuhstava-samāsārṭha*.
⁸⁶⁾ これら6写本には後に詳しく触れる。

本⁸⁷⁾にあり、カトゥマンドゥウ写本にはない。また‘Catulstava’という題名は、少なくとも東大写本とカトゥマンドゥウ写本には見られない。

- Is4* : *PP*(p.413.6-7), *BCP*(p.533.18-20), *TSS*(P no.4534, Nu95a2-3), *BSP*(P no.5277, Ša183b3).
Is5 : *MA*(pp.199.20-200.2-5), *TSS*(P no.4534, Nu95a3-4), **GR*(P no.6143, Ca184b2-3).
Is8 : *BCP*(p.476.14-15).
Is9 : *BCP*(p.476.16-17).
Is10 : *MA*(p.165.4-7), **GR*(P no.6143, Ca156a3-5).
Is11 : *PP*(p.64.6-7).
Is12 : *AĀ*(ab)(p.299.12), *AS*(ab)(p.28.16).
Is13 : *BCP*(p.587.6-8).
Is18 : *BCP*(p.533.8-10), *MA*(p.97.9-12), **CSġ*(P no.5266, Ya64a1-2).
Is19 : *BCP*(p.533.11-12).
Is20 : *BCP*(p.533.13-14).
Is21 : *PP*(pp.54.3-54.4, 234.8-234.9), **LR*(p.68.20-22).
Is22 : *AĀ*(ab)(pp.348.22, 381.17, 405.27, 441.30, 482.30, 490.12, 536.1), *SĀ*(ab)(p.481.14),
BCP(p.417.6-8), *PS*(p.120.26-28), **LR*(p.69.2-3).
Is23 : *BCP*(pp.359.7-359.9, 415.2-415.4), *TSS*(P no.4534, Nu98b5-6), *MA*(p.310.11-16),
**GR*(P no.6143, Ca239b6-7), **LN*(p.23.3-7), **LR*(p.146.14-18), **HG*(289.4-289.5).
Is24 : *BCP*(p.489.16-18), *TSS*(P no.4534, Nu98b6-7).
Is26 : *ŠSV*(p.222.4-7).
Is27 : *MA*(p.23.13-14), **GR*(P no.6143, Ca37b7-8).
Ns1 : *CSS*(pp.238.15, 238.22-238.23, 239.20-239.21).
Ns2 : *CSS*(p.240.6-7, 10, 15).
Ns7 : *BCP*(p.420.1-3), *BSP*(P no.5277, Ša169a2-3), *AS*(p.22.8-9), **TR*(P no.3085, Mi130b3).
Ns9 : *BCP*(pp.488.17, 489.1-489.2), *BSP*(P no.5277, Ša174b8), **MU*(P no.5325, A125a1-2).
Ns13 : *PP*(p.215.5-6), *ŠSV*(p.253.3-6).
Ns15 : *TS*(P no.4531, Nu30b3-4).
Ns18 : *PK*(p.31, III-2), *CP*(P no.2668, Gi104a8), *PU*(P no.2658, A212a6-7), *GS*(P no.2663, Gi33a3-4).
Ns19 : *PK*(p.31, III-3), *CP*(P no.2668, Gi104b1), *PU*(P no.2658, A212a7-8), *GS*(P no.2663, Gi33a4).
Ns20 : *CSS*(p.242.2).

⁸⁷⁾ Tola, F. and Dragonetti, C. (1985) p.4.27-29.

- Ns21* : *SSum*(p.388.20-21), *AS*(p.22.1-3), *BMP*(P no.5344, Ki298b3-4), *TSS*(P no.4534, Nu92b3-5), *TA*(P no.4532, Nu46a8-46b1), **TR*(P no.3085, Mi130a8-b1).
Ns22 : *CSS*(p.242.4, 6).
Ns24 : *AS*(p.22.1-3), *MP*(P no.5254, Tsha361a4-5), *CSS*(p.242.6, 7, 8), **MU*(P no.5325, A124b7-8).
Ns25 : *CSS*(p.242.12, 13, 14).
As1 : *CSS*(pp.242.25, 243.12, 244.1), **LN*(p.21.8-11).
As9 : *TS*(P no.4531, Nu40a3-4).
As19 : *BCP*(p.375.3-5), *Bġ*(p.82), *TSS*(P no.4534, Nu105a6-8), *BCV*(P no.5282, Ša308b8),
**MP*(P no.5254, Tsha327a3).
As20 : **MP*(P no.5254, Tsha327a5-6).
As22 : **MP*(ab)(P no.5254, Tsha345b2).
As25 : *BCP*(ad)(p.573.10-11).
As29 : *BCP*(p.528.8-10).
As36 : *BCP*(p.573.12-13).
As38 : *TSS*(P no.4534, Nu102a2-3).
As39 : *TSS*(P no.4534, Nu102a3-4).
As40 : *TSS*(P no.4534, Nu102a4-5), *BCP*(p.528.11-12), *AĀ*(ab)(pp.348.22, 381.17, 405.27, 441.30, 482.30, 490.12, 536.1).
As41 : *TSS*(ab)(P no.4534, Nu102a5), *BCP*(p.528.13-15).
As42 : *BCP*(p.590.13-15).
As43 : *AS*(ab)(p.24.9), *CG*(ab)(p.209.24-25).
As47 : *TSS*(P no.4534, Nu97a7-8).
As48 : *TSS*(P no.4534, Nu97a8-97b1).
As57 : *TS*(P no.4531, Nu39b8-40a1).
Ps1 : *CSS*(p.245.5-6, 6-7).
Ps2 : *CSS*(p.245.10-11).
Ps3 : *CSS*(p.245.7).
Ps4 : *SĀ*(d)(p.489.5).
Ps5 : *SĀ*(a)(p.489.3), *CG*(ab)(p.190.34-35).
Ps7 : **TSS*(P no.4534, Nu102a1-2).
Ps8 : *CSS*(p.245.8), **MP*(P no.5254, Tsha357a7-8).
Ps9 : *CSS*(p.245.15, 16), *BMP*(cd)(P no.5344, Ki284a5).
Ps10 : *CSS*(p.245.19-20), *BMP*(P no.5344, Ki284a5-6).

テキストおよび注釈書について⁸⁸⁾

CS のサンスクリット写本——CS はこれまでにトウチツ氏⁸⁹⁾(*Ns* と *Ps* のみ)とリン
トナー氏⁹⁰⁾(*Ls* と *As* 及び Tucci, G. (1932) への訂正表)によって校訂がなされ、現在の
CS 研究ではこの2版が使用されている。また、最近ナムドゥル氏⁹¹⁾によって前二者が
用いなくなった写本を使用した校訂本(4つの讃歌の揃ったもの)も出版された。ここで、
CS のサンスクリット写本についてまとめると以下のようになる。

<4つの讃歌のそろったもの> T⁹²⁾, W⁹³⁾, M⁹⁴⁾, G⁹⁵⁾, Ka⁹⁶⁾, Kha⁹⁷⁾, CSS⁹⁸⁾.

⁸⁸⁾ 拙稿(2003*)をもとに、まとめた。

⁸⁹⁾ Tucci, G. (1932).

⁹⁰⁾ Lindtner, Chr. (1982).

⁹¹⁾ Namdol, G. (2001).

⁹²⁾ A Sanskrit manuscript of CS with Śīromani's commentary, *Ākāṅkṣā*, kept in the Tokyo University Library. Matsumami, S. (1965), New No.340-1 (Old No.344-1), folios 1a-36a. Material: paper. Size: 23.8 × 8.3cm. Number of lines: 9(except 1a(4 lines) and 36a(8 lines)). Character: Newārī. Date of transcription: Samvat 612(=1492) or 693(=1573). Quality: on the whole very good except the folios 1-4 are damaged on their right sides. Some marginal additions of black and red ink. It was brought to Tokyo from Nepal by Ekai Kawaguchi.

⁹³⁾ A Sanskrit manuscript of CS. Microfiche Edition, IASWR, MBB-I-93 (film strip no. MBB-1971-93-100), folios 2a-14b. Material: Nepālī paper. Size: 20 × 8cm. Number of lines: 6(except 14b(3 lines)). Character: Nawārī. Date: uncertain. Quality: the folios 1 and 3 (= *Ls* 1-5c, 15c-25) are missing and all the folios are damaged a little bit. Lindtner, Chr. (1982) p.124.9-10: 'Microfiche of a Sanskrit Ms in the possession of Manuajra Vajracarya, Kathmandu.' Lindtner, Chr. (1982) p.123.18-21: 'A copy (microfilm in my possession) of the late Prof. M. Tubiansky's transcript or recension of a Sanskrit Ms of CS from Mongolia. No information accessible concerning the date, condition etc. of this Ms.' About the discovery of this manuscript: Obermiller, E. (1937) p.3.

⁹⁴⁾ Lindtner, Chr. (1982) pp.123.22-124.3: 'Xerox (in my possession) of a handcopy of CS prepared by Dr. V. V. Gokhale (Poona): 'In 1949 I was permitted to take a *handcopy* of the original papermanuscript [i.e. of CS and other texts] by the abbot of the Kundeling monastery. It was a Ms written in the Bengal script of about the 13th or 14th century, I suppose...' (Quoted from a letter dated 7.10.1976).'

⁹⁵⁾ Namdol, G. (2001) III p.90.14-17. *Akhila Nepala Mahāyānabuddhasamājā*, edited by Nepal Pandit, Divyavajra Vajracarya, Kathmandu. It is an edition of CS with a Nepalese translation and a summary of each stava.

⁹⁶⁾ Namdol, G. (2001) III p.90.18-29. *Bauddhistotro-saṅgraha*, edited by Pandit, Janārdana Śāstri Pāṇḍeya, Vārāṇasī. It is an edition of 108 staves, which contains the 4 staves of CS, but not as CS.

⁹⁷⁾ Tucci, G. (1956) pp.234-246. 'The author of the Samāsārtha is unknown to me. Perhaps he was one of the many pandits who took shelter in Tibet when the time of persecution or decadence came in India.' *ibid.* p.237.18-22.

⁹⁸⁾

<単独の讃歌のもの> DhI⁹⁹⁾, DhII¹⁰⁰⁾, DhIII¹⁰¹⁾, DhIV¹⁰²⁾, DhV¹⁰³⁾.

<不明のもの> Tucci, G. (1932) の写本。

以上の写本のうち、最も読みが正確で信頼のおけるものは T である。Lindtner, Chr. (1982) でもほぼこの写本の読みが採用されている。T は偶頌に並べて注釈が書かれており、偶頌と注釈中で二度テキストの読みが確認できる上、注釈自体も逐語的で、偈中の語の他の語への置き換えや文法的説明で構成されていて、テキストの読みを確認する場面に非常に有益である。すでに筆者はこの注釈から得られた新たな読みのうち、重要なものをいくつか発表した¹⁰⁴⁾。W からはまれにより読みが得られるものの、単純な書き誤りなどが多い。M と G はリントナー氏の個人蔵のもので、また Ka と Kha は資料を確認できなかつたため、これら4本は筆者未見。いずれも正確には写本そのものではない。ただし、M と G に関しては Lindtner, Chr. (1982) の校訂を見る限り、読みとしてはあまりよいものがなく、Ka と Kha に関しては Namdol, G. (2001) を見る限り次の DhI-DhV に共通した読みがみられる。CSS は CS の注釈であるが、CS 本文の引用はほとんどなく、校訂に際してはあまり役に立たない。

Ls に関しては単独のものが、新たに見つかった DhIII を含めて計5本存在するが、それらはいずれもいわゆる "Dhāraṇīsaṅgraha"¹⁰⁵⁾に収められたものである。DhI は5つの中で最も綴り字の誤りが少ないのに対し、DhIII は誤りが多く、ほぼ全ての単語を訂正

⁹⁹⁾ A Sanskrit manuscript of *Ls* in "Dhāraṇī", kept in the Tokyo University Library. Matsumami, S. (1965) New No.419-III-152, folios 292b4-294a5. Material: paper. Size: 14.5/8 × 3.3/4 inch. Number of lines: 6. Character: Newārī. Date of transcription: Samvat 912 (=1792). Junjiro Takakusu's collection. New No.419 has 312 leaves. (Matsumami, S. (1965) p.149.5-15および『梵典 III』p.140.10-11を参照。)

¹⁰⁰⁾ A Sanskrit manuscript of *Śrī-Lokāṭīstava-nāma-stotra* (= *Ls*) in "Dhāraṇī and Stotras", kept in the Tokyo University Library. Matsumami, S. (1965), New No.420-XI-5, folios 10b5-12a4. Material: paper. Size: 13 × 3.3/4 inch. Number of lines: 6. Character: Newārī. Date: uncertain. New No.420-XI has 18 leaves. Junjiro Takakusu's collection. (Matsumami, S. (1965) pp.149.16-150.1および『梵典 III』p.140.12-14を参照。)

¹⁰¹⁾ A Sanskrit manuscript of *Śrī-Lokāṭīstava-nāma-stotra* (= *Ls*), which constitutes a part of *Dhāraṇīsaṅgraha-purāṇamahāyāna-sūtra-ratnāraṇī*. Microfiche Edition, IASWR, MBB-II-171-74(film strip no. MBB-1971-171-93), folios 237b4-240a1. Date: Samvat 905(=1785)(282a1).

¹⁰²⁾ Character: Nawārī. MBB-II-171 has 282 leaves and contains 108 works.

¹⁰³⁾ A Sanskrit manuscript of *Ls*, which constitutes a part of a "Dhāraṇīsaṅgraha". Filiozat, J. (1941), No.62-46, folios 97a8-98a7. Size: 40.5 × 13.5cm. Number of lines: 9. Date: uncertain. Character: Nawārī. No.62 has 169 folios and contains 150 works. Hodgson-Burnout's collection (Old No. Burnout 108). (Filiozat, J. (1941) pp.31.10-57.26.)

¹⁰⁴⁾ A Sanskrit manuscript of *Ls* in "Dhāraṇī collection", kept in Toyo Bunko, No.13-130, folios 200a4-201b3. Kaneko, R. and Matsumami, Y. (1979). Size: 40.8 × 11cm. Number of lines: 7. Date: uncertain. Character: Nawārī. No.13 has 354 folios (folios 1-31, 130-131, 154-159 and 344 are missing) and contains 267 works. Ekai Kawaguchi's collection. (金子長太 (1976) pp.78-86, esp. p.80.4-7.)

¹⁰⁵⁾ 拙稿 (2002).

¹⁰⁶⁾ "Dhāraṇīsaṅgraha" には不明な点が多く残されている。『梵典 IV』pp.61-62. ここに報告されている "Dhāraṇīsaṅgraha" 写本のうち IASWR の6写本を確認した結果、6本のうち MBB-II-171 (p.62.8) には-71とあるがこれは-171の誤り)のみに *Ls* が含まれることが分かった。(この調査は加納和雄氏(京都大学大学院)の助言なしにはありえなかつた。また DhV の情報も提供頂いた。お礼申し上げる。) また、その他未確認の写本にも *Ls* が含まれている可能性がある。

する必要がある。次いで DhII と DhV にも誤りが多い。DhIV は比較的少ない。読みの傾向は DhI, DhIV, DhV の 3 本と DhII, DhIII の 2 本の 2 つで異なる。DhII と DhIII は *Is* 前後の作品構成も共通している¹⁰⁸⁾。DhI~DhV のいずれも、T とは異なる読みをいくつかもつ。

最後に挙げたトゥッチ氏の写本は、*Ns* と *Ps* のみのものであるが、もともと 4 つの揃った *CS* としての写本であったのか、讃歌ごとに別々の写本なのか、写本の作品構成がよく分らない。同氏のわずかな記述¹⁰⁹⁾から類推すれば、T のようなもの、あるいは T と同一テキストで、他の 2 讃歌の部分が散逸したもの、という可能性も考えられる。実際、Tucci, G. (1932) の *Ns* と *Ps* のテキストは T の読みとよく一致する。

東大写本について——この *CS* 写本 (T) は東京大学総合図書館所蔵のもので、注釈書のタイトルは *Akārīṭkā*。その他の情報は Matsunami, S. (1965) p.122.1-12 や斎藤明 (2001*) に詳しい。それらに加え、筆者が本写本を直接閲覧して新たに得た情報や、また、うまく読めない箇所がかなりあり、不完全ではあるけれども、奥書きの記述を挙げてみたい。

本注釈書 (T) が含まれる写本は 3 つの作品から構成されており、それで 1 つの写本の束となっている。紙もインクも同一のものが使われていることから、3 作品が同時に筆写されたものと考えられる。ただし、第 2 番目の作品は字体が他 2 つとは異なっており、文字の太さも若干細い。

<写本の束の構成> (作品名、著者名、フォリオ、字体)

I. *Akārīṭkā* of *Catuhstava*, Śiromaṇi, 1a-36a, Newārī.

II. *Mekhālīṭkā* of *Dohakoṣa*, Kṛṣṇacārya, 36b-45b, Bengālī.

III. *Adhyātmāsārasatataka*, Prabhākara Gupta, 1a-16a, Newārī.

*その他の情報 (Matsunami, S. (1965) p.122.10-12 に若干の訂正を加える)

Paper, 61 leaves, 9 lines(sometimes 4, 5, 7 or 8 lines), 23.8 × 8.3cm, Character:

I. Newārī, II. Bengālī, III. Newārī; Dates: samvat 612(fol.16a7) and 693(16b1),

Kawaguchi Ekai's collection, the fols.1-4 of I. are damaged on their right sides.

¹⁰⁸⁾ DhI~DhV の前後はそれぞれ以下のようになっている (順に *Is* の前の作品、後の作品): DhI: *Śrī-trailokyaviṇyaya nāma dhāravā* (292b4), *Śrīpīṭhāstavaśloka* (298b2); DhII: *Āryasrāvopākṣara-bhagavat-śrīprajñāpāramitāśāla nāma dhāravā* (10b4-5), *Āryasrāvopākṣaravartī nāma dhāravā* (12a5-6); DhIII: *Āryasrāvopākṣarabhagavat-śrīprajñāpāramitāśāla nāma dhāravā* (237b2-3), *Āryasrāvopākṣaravartī nāma dhāravā* (240a3); DhIV: *Āryasrāvopākṣarabhagavat-prajñāpāramitā* (97a7), *Jātsmaro nāma dhāravā* (98b3); DhV: *Śrītrailokyaviṇyaya nāma dhāravā* (200a4), *Āryapāramitāyur nāma mahāyānasūtra*.

¹⁰⁹⁾ Tucci, G. (1932) p.311.12-15: 'My text is based on a Nepalese paper manuscript, not very old, which I bought in Nepal; the text is accompanied by a *Tiṅā*, which is a mere *bāla-bodhinī*, giving the grammatical construction of the sentences, nothing more.'

<奥書きの記述>¹⁰⁸⁾

(記号)

.. テキストのある部分で判読不能な文字。これで一文字 (aksara) 分。

[] 文字が欠けていたりかすれたりして、読みの確定のできない部分。

() 写本の破損した部分で編者が補った部分。ただし (2a3) などではフォリオの行番号。

+++ 写本の破損部分。+ で一文字 (aksara) 分。

* Virāṇa

○ 綴じ穴。

{ } テキストの外に追加されている部分。余白 (margin) の記述。

○○ 花の線描。

I の冒頭

(1a1) om śrī-maṇi¹-saṃgha-mahā-vihārōtpanna-śrīman-mahā-panḍitācārya-
(1a2)candra-paṭikasyēdaṃ puṇyaṃ² ko 'yaṃ³ ye janālobhānyā yena (1a3) nīyati
lupyaṭi gopyate⁴ tebhyośubhuhabhyā (1a4) māptuyuh // ○ ○ // // // śubham⁵
(1b1) [namaḥ sarva-jñāya // natvōgra-tārā-caraṇārvindaṃ guruḥ padā +++-oktyā
/ samyak*-śiśhanāma +++ (1b2)ṛtham artham⁶ vivavre jagad-artha-siddhyai //
prajñā-pāramitā-lakṣē-du(r)lla +++-kṣanaliḥ / durilakṣya-lakṣa-⁷++++ (1b3)kṣam
khaṇḍa-catustaye // //

(試訳) 栄えある Maṇisaṃgha 大僧院に生まれた、輝かしい大学者である師、Candrapatika のこの福徳……。幸あれ。

一切智者に敬礼します。Ugratārā の足元の蓮華に敬礼して、尊者の足……。4 つの章において。

I の最後

(36a5) iti paramārtha-stavaḥ⁸ samāptaḥ⁹ // // // kṛtīr ācārya-[śrī-nā](36a6)gārjuna-
pādānām iti // // // ¹⁰ akārī-ṭkēyam¹¹ anutta[mo]tāmā samyak-sad-ācārya-śro-
maṇer i[yaṇ] / a(36a7)dhyeṣitasyāpi hitārthinādhunā¹² sat-sādhunā kāntipurā-
dhivāsinā // .. // likhiteyaṃ rūparājena // (36a8) om bhagavān* bhaga ivākhyā-
taḥ¹³ kāma-rāga-nikṛtakaḥ / bhagnāḥ paro jīṭāḥ kleśā bhagas¹⁴ tasya / sa ucyate
//

(試訳) 以上、『勝義讃』を終わる。[これらは] 師である栄えあるナーガルジュナ足下の著作である。以上。この *Akārīṭkā* (『A という文字をもつ注釈』?) はこの上なく最高であり、これは正当で正しい師 Śiromaṇi の [著作] である。また [教えを] 乞うものの利益を求める [者であり]、今日、正しく高貴な [著] である。Kāntipura (= Kathmandu) に住む Rūparāja によって、これは筆写された。ああ、世尊は、太陽 (bhaga) のようにだと称され、欲望と食りを断っている。[あるいは] その者の煩悩は打破され、はるかまで制圧されており、[またその者には] 徳目 (bhaga) がある。[そういう] 彼が [世尊と] 言われている。

1	-maṇi Ms	8	-stava Ms
2	puṇya Ms	9	samāpta Ms
3	ko yaṃ ○ Ms	10	// ○ ○ // Ms
4	gopya○te Ms	11	-ṭkē- Ms
5	-ṛ Ms	12	hiṭā-// ○ ○ // thunādhunā / Ms
6	-rtha / martham Ms	13	-ta Ms
7	durilakṣe- Ms	14	bhagas Ms

¹⁰⁸⁾ 奥書きの解説にあたっては、ネパールの留学生スダン・シャキヤ (Sudan Shakyā) 氏 (東北大学大学院) の助言を請うた。同氏によれば、これら奥書きにはネワリー語 (Newārī) が混じっているという。'some of the words found in the MS can be read as Newari language' (2004 年 5 月 6 日付、筆者宛の個人的電子メールより) ネワリーについて: Shusser, M. S. (1982) pp.392-393.

III の最後

(16a2) adhyātmasāśatakaṃ samāptam iti // kṛtiḥ¹⁵ prabhākaragupta-pādanām śubham¹⁶ // magadha-deśe 'nāgataṃ'¹⁷ (16a3) naipāla-maṇḍalaka¹⁸ ācārya-paṇḍita-śrī-śiromaniṇā nipuṇa¹⁹ vyākhyānaṃ²⁰ kṛtam²¹ // śrūtaṃ tadā maṇi-saṃgha-vihāra.. (16a4) lamtale-śrī-[devī]-sthānavāsita-vajrācā-**ōrya-śrī-rūparājena** sarva-sattvārthāya²² tac-chāstram lekhitam iti (16a5) // // tanaya-**[śrī]-jaina-candra**²³ śrī-jīāna-candra²⁴ ○ thva paṇiṣṭaṃ nimatinathamadvyaṇ dvāthyaṇ pāda jīvaṇkāyākhā(16a6) nagadvacosyaṃ tayā jīvaṇ ajīva-tīkā ○ saṃ-bandha²⁵ soya²⁶ {va}-paṇḍita-svāmī-lokanahlvamkāṇa-jana-jīva(16a7)thyāṇ co-yā aprasaṇna-juyamatera jana-vimati-kṣaro // śreyo stu / **saṃvat**²⁸ **612** māgha-**[śukla]-prati-pad***-śaṇivāre śubham²⁷ // (16b1) om namo bhagavate vajra-dhara-svāmīne // prajñā-pāramitā²⁸ om **saṃvat**²⁹ **693** bhāḍavavā .. thākud . mūladyā . ā(16b2)va-parijñā³⁰ ādinakṣaro cilāvavi e 020 ddaṇṭāḥ gogalamra .. śigoda .. tadyami(16b3)hmā . ikramihma 4 thāspamocakāvasidhayaḥkāṣaro // .. // om sa[ī]va-tathāgata- kra(16b4)kāsa amāṇanikātami u ○ sa[ī]va-tathāgata-dhiti-tayamā .. tane (16b5)bhya-vajra-dhara-svāmīn* / (試訳) *Adhyātmāsāśataka* を終わる。以上、Prabhākaragupta 足下の著作。幸あれ。マガダ国で、未来にはネパール地方¹⁰⁹で、巧みな、師であり学者である栄えあるŚiromani によって作られた注釈。[次のように]知られている。その時 Manisaṃgha 僧院..... Vajrācārya(金剛乗の僧)である栄えあるRūparāja によってあらゆる衆生のために、その経典が書かれた。と。..... 恵みあらんことを。Saṃvat 暦 612 年マールガ月白分第1日(西暦 1492 年 2 月 1 日)土曜日に。幸あれ。ああ、世尊である Vajredharasvāmīn に敬れします。知恵の完成。ああ、Saṃvat 暦 693 年(西暦 1573 年)

III の後の奥書きには Saṃvat 612 (16a7), Saṃvat 693 (16b1) と 2 つの年代がみられるが、それらが何の年代かは不明。

I (= *Akārīṭhka*) の冒頭と最後の奥書きと III の後の奥書きには共通するいくつかの固有名詞がみられる。‘Samyak-sad-ācārya-Śiromani’ (I, 36a6) および ‘Rūparāja’ (I, 36a7) は、‘Ācārya-paṇḍita-śrī-Śiromani’ (III, 16a3) および ‘Vajrācārya-śrī-Rūparāja’ (III, 16a4) と同じ二人の組み合わせだと考えられる。同様に、‘Śrī-maṇisaṃgha-mahāvihāra’ (I, 1a1) と ‘Maṇisaṃgha-vihāra’ (III, 16a3) も同一のものだと考えられる。

これら 3 つの固有名詞のうち Śiromani は *Akārīṭhka* の注釈者である。人物の詳細は不

15	kṛti Ms	23	-candra Ms
16	śubha Ms	24	-candra Ms
17	nāgata Ms	25	sambandha Ms
18	-le Ms	26	sam Ms
19	/ nipuṇa Ms	27	śubha Ms
20	-na Ms	28	-pāramitā
21	-tan Ms	29	saṃvata Ms
22	-sattvā- Ms	30	-pall- Ms

¹⁰⁹⁾ Nepal-maṇḍala とは Kathmandu 盆地を指す：田中公明、吉崎一美 (1998) p.183.4-7.

明だが、奥書き (16a2-3) からマガダ国で、その後ネパール地方でこの注釈を書いたことが分かる。また、この写本に見られる年代 Saṃvat 612 (=1492) の人物に Raghunātha Śiromani (ca. 1475–1550)¹¹⁰⁾ がいる。彼は新ニヤヤ学派の巨匠で、直ちに中観派と結びつくとは思えないが、この注釈書の内容が特定の学派に限定されない、学校の教材レベルのものであることを考慮すると、強く否定する理由もない。また、マガダからネパールにかけては彼の活動した地域とも重なる¹¹¹⁾。注釈書の中に彼の思想と共通する点があるかどうか等の検討は今後の課題である。

Rūparāja に関しては ‘likhita’ (I, 36a7) と ‘lekhitā’ (III, 16a4) の解釈が問題となる。前者の場合「[Rūparāja によって] 筆写された」となるが、後者では「筆写させられた」と使役の意味が加わってくる。つまり、どちらの読みをとるかで、Rūparāja が筆者本人であるか、筆写を命じた施主であるかが分かれる。Rūparāja の肩書き ‘Vajrācārya’ (16a4)¹¹²⁾ という、僧院の僧侶という身分を考慮すると、施主というよりはむしろ筆者とみるほうが妥当であろう¹¹³⁾。彼が住むとされる ‘Kāntipura’ (36a7) とはカトマンズドゥ(Kathmandu)を指す¹¹⁴⁾。

最後の Maṇisaṃgha-mahāvihāra は、Vajrācārya で構成される、カトマンズドゥの主な僧院の一つ¹¹⁵⁾。奥書きの人物との関係は不明。

また、I の奥書きと III の後の奥書きに重複した記述がみられることには注意を要する。III の後の奥書きには ‘Śiromani によって作られた注釈 (vyākhyāna)’ (16a3) という記述があるが、それが指すものは I の *Akārīṭhka* をおいて他には考えられない。というのも、II は注釈書であるが著者は Kṛpācārya であり、III は注釈書ではない、著者は Prabhākaragupta である。したがって、III の後にある奥書きは I の奥書きであることが分かる。写本の束の最後に、再び I の奥書きがきていることから、この写本の束の中心は I で、II, III はそれに添えられたものだと考えられる。中観の文献である I になぜ密教文献である II, III が添えられたのかということは、筆者 Rūparāja が Vajrācārya という「金剛乗の僧」であること、さらには当時のネパールの社会状況、つまり密教の隆盛¹¹⁶⁾が影響していると考えられる。

¹¹⁰⁾ Raghunātha Śiromani の生涯に関しては以下の研究に詳しい：Ingalls, D. H. H. (1951) pp.9.6–20.3. 彼は優れた学者としての頭角を早くから現わしていたようである。(pp.9.15–9.16, 12.12–12.18.) Raghunātha Śiromani の呼称は、Raghunātha, Tarkka-śiromani, ‘Śrī-Śiromani-Bhāṭṭācārya, Bhāṭṭācārya śiromani, Bhāṭṭācāryākṣaja (p.9.note 31) と様々で、かならずしも ‘Raghunātha’ という語を伴うとは限らない。

¹¹¹⁾ 彼はおそらく 1490–1500 頃に、Mithila という Videha 国の首都でネパールとの国境付近の都市に留学している：Ingalls, D. H. H. (1951) pp.13.8–13.10, 15.7. この都市こそがこの奥書きにあるネパール地方に当たるとのかもしれない。

¹¹²⁾ 田中公明、吉崎一美 (1998) pp.5.12–6.2. 「[ネパールの] 仏教徒セクション」は、僧侶カーストと在家仏教徒カーストに二分される。このうち僧侶カーストは、ヴァジュラチャーリヤとシャーマンという二つのサブカーストからなる。「僧侶カーストのメンバーは(中略)仏教寺院に所属し、サンガを構成している。」

¹¹³⁾ 拙稿 (2002) p.9.8: 「筆写を命じたのは Rūparāja」を「筆写者は Rūparāja」と訂正する。

¹¹⁴⁾ 三枝礼子 (1997) p.129.left 31–32.

¹¹⁵⁾ Locke, J. K. (1985) p.250.27.

¹¹⁶⁾ 10 世紀以降にはネパールで金剛乘仏教が「爆発的展開」をする。：田中公明、吉崎一美 (1998) pp.19.11–20.11.